

最優秀賞

私と交通安全

(関東) 西多摩運送(株)

今井 恵

私は10歳の時に6つ上の兄を交通事故で亡くしました。

あれは夏の始まりの土曜日から日曜日へと日付が変わった日の事でした。

真夜中に泣きじゃくる姉の声で目が覚めた私は何が起きているのか理解が出来ず、眠たいのに起こされた事に少し腹を立てていました。次に目が覚めると朝になっており、どこからか帰ってきた母に「今から警察に行くから準備をして」と言われ、眠い目のまま言われるがまま車に乗り込みました。姉はまだ泣きじゃくっていました。

警察署に到着すると、暗い無機質な部屋へと案内され、冷たいベッドの上で眠っている兄の姿があり、その時に交通事故で亡くなつたのだと知らされました。

つい数日前にお小遣いをくれた兄の姿と、目の前で冷たい体で横たわる兄の姿がどうしても結びつかなくて、私はとても混乱しました。

寝不足のせいもあり、安置所の前で泣いている兄の友人達の姿も、枯れることなく泣き続ける姉の姿も、それまで見たことのない程悲しい表情をした母の姿も、当時はその全ての光景が夢の中の出来事のように感じましたが、それでもその光景を今でも鮮明に覚えています。

慌ただしく始まった葬儀の準備中、母は忙しく動き回り、もう一人の兄や姉は友人達への対応をしており、私と弟はそれを葬儀場の隅からただ見ているだけでした。

葬儀が始まるとあちらこちらですすり泣く声が聞こえました。兄を慕っていた人達の泣き声の中、棺の中で眠る傷だらけの兄の姿を見て、どうして兄だけはこの中にいるのだろうと目の前の現実を受け入れられずにいました。

数日前まで笑っていたのに、一緒にふざけていたのに、目を合わせて話していたのに、声をかけて目を開けることはなく、温かかった手のぬくもりは失われ、もう二度と笑い返してくれることのなくなった兄の姿をただ茫然と見つめています。

最後の別れではすすり泣きではなく、大きな声をあげて泣いてくれる人もいて兄の死を多くの参列者が嘆き悲しんでいました。

その悲しみの泣き声が兄との別れが永遠であることを突き付けてきた瞬間でもありました。

あの悲しみで溢れた会場、悲痛な泣き声、参列者の心を潰されたような表情は何年経っても忘れません。

今ではたくさんの孫に囲まれ明るく過ごせている母も、兄の死から数年はお祭りなど子供が集まる場所を嫌がり、見のも辛いと言って人々が楽しむ場所を避けるように生活していました。

私も母になり、子供を失うことがどれだけ心を引き裂かることなのか、想像しただけでも恐ろしくなります。

そんな経験から、運転する際に交通ルールを守って運転することは当たり前ですが、私は兄の事故の記憶を思い出すことにしています。

事故から葬儀までの辛く悲しい時間、嘆き悲しんでいる家族や友人達の姿、そして棺の中の傷だらけの兄の姿、それらを思い出すことで、あんな思いをする人がいてはいけないと気が引き締まるのです。

事故は経験した人にしか怖さや痛み、悲しみは分からぬかもしれません。

ですが、それではダメなのです。経験してはいけないのです。

運転をする全ての皆さま、自分の大切な人のためだけではなく、誰かの大切な人を守るためにも自分の運転がどのように影響するのかを想像し、事故で悲しむ人が一人でもいなくなるよう、「安全に運転をする」と強く意識して運転してください。